

---

GOD EATER 非日常な日常？

ヴァジュラ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

G O D E A T E R 非日常な日常？

### 【Nコード】

N3000Z

### 【作者名】

ヴァジュラ

### 【あらすじ】

シオが月へ行ってから極東支部の話。地球に残りアラガミを倒し続けることを彼らは選んだ。そんな彼らの平和(?)な日常な話です。

オリ主、オリキャラも出てきてます。初投稿なのでグダグダかもしれませんが、よろしくお願いします。

## 第1話 極東支部のリーダー（前書き）

初投稿です。

駄文かもしれませんが、よろしく願います。

## 第1話 極東支部のリーダー

龍SIDE

「ふゝ、任務完了。」

オウガテイルを狩り終えて、一息つく。

最近小型の任務ばかりだよなあ、良いことなのかもしれないけど。

TELL TELL

「ん？どうしたヒバリ。」

「どうしたじゃありません。また一人で任務に行ってますね。アリ

サさんが怒ってますよ。」

「……、すぐ戻る。」

あゝヤバいな。さてどうするか。

・  
・  
・

「お疲れさん、……どうした？」

「いやまたアリサに怒られそうなんですよ。どうしましょう、タケさん？」

このひとはタケミさんヘリのパイロットをやっている。

俺はタケさんと呼んでいる。

「知らん、自分で何とかしろ。」

結構、厳しい人です……。

「そうですね。はゝがんばりますか。」  
何を？

「……任務の時より気合入ってないか？」

「そんなことないですよ同じくらいです。」

任務の時と同じでいいのか、俺……

「……まあいい、飛ぶぞ？」

「あ、はい。」

「リツカ、神器のメンテナンス頼めるか？」

「いいよ。また一人で任務行つたんだつて、懲りないね。」

「まあな。・・・さて、怒られに行くか。」

これってかなりアリサに失礼な気がする。

というかアリサに怒られた後にツバキさんにも怒られるんだろうな。

・

は、ツバキさんの方が怖いんだよなあ。訓練増やされたりするし。

逃げ場はないし、逝くしかないか。

「まあみんな心配してるつてことだよ。私もね。」

「ああ、ありがとな。」

・

・

・

「帰つたか。・・・アリサが怒ってるぞ。」

「ああ、分かつてるよ、ソーマ。心配してくれてありがとな。」

「・・・心配などしてない。こっちに被害がこないようにしてもら

いたただけだ。」

「悪いな。・・・今度から気をつけるよ。」

ソーマ根は優しいのになあ。「素直になればいいのに。」

「五月蠅い。大きなお世話だ。」

あれ、声に出てたか。気をつけねえとな。

「リーダー!!」

「え、つと、アリサさん？怒ってらっしゃいますでしょうか？」

めちゃくちゃ下手にでております。前、アリサが本気で怒ったとき

は、

ヤバかったからな。

「・・・良かったです。無事でよかったです。」

あれ、アリサ泣いてる？ なぜ？

「本当に良かったです。」

すると、アリサが突然抱きついてきた。

「え〜っと、アリサ？どうかしたのか？」

えつと聞こえてないのか。というかやっぱり泣いてるよな。どうしてだ？

困ってたらサクヤさんが、小声で事情を説明してくれた。

「アリサね、あなたがいなくなる夢を見たらしいのよ。」  
だからこんなに泣いてるのか。

「アリサ、大丈夫だって。絶対いなくなったりしないから、な？」

「・・・本当ですか？」

「ああ、絶対だ。それにアリサの泣いてる顔なんて見たくないからな。」

あまり人の泣いてる顔は見たくない。泣いて欲しくないっていうのは、

自分勝手かもしれないけど。

「／／／／／分かりました。でも、もう少しこうさせて下さい。」

「ああ、いいぞ。」

これで落ち着いてくれるなら、別にいいしな。

ていうか、サクヤさんなんか笑ってません？ なぜ？

「アリサ落ち着いたか？」

「はい。ありがとうございます。」

「じゃあ、そろそろはな「ダメです。」・・・はい。」  
落ち着いたのになぜかアリサは腕にしがみついている。

いや、さすがに無理に離れさせるのは無理ですよ。さっきまで泣いてたわけだし。

「龍、帰ってたか。それじゃあ、ブリ ニングルームに來い。」

「はい。でも……」

アリサを見る

「……いいですよ。それじゃあ。」

すんなり離れたな。さて、ツバキさんに怒られに逝きますか。

字が違う？あつてるよ。ツバキさん怒るとマジ鬼だから。

「よし。訓練5割増しに「すみませんでした。さあ、行きましょう。」

「ああ。」

人の心を読むのは反則だと思います。

「また一人で任務に行ったな。」

「はい。」

素直に認める。言い訳しても無駄だしね。

「は、やはりそいつを許可するべきでわなかったな。」

ツバキさんが任務閲覧機を指差す。

こいつはサカキ博士に作ってもらった。任務を勝手に見える便利道具だ。

こいつがあるおかげで一人で任務に行けるようなものだ。

「取り上げるべきか……」

「ちよつ、待って下さい。一人で行くの止めるんでそれだけは許して下さい。」

「は、分かった。ただし、次一人で行けば……分かるな？」

「……はい。」

多分こいつ取り上げられるだろうな……

「訓練も5倍だぞ。」

鬼ですか。いつも思ってますけど、鬼ですよね？

「やはり取り上げるべきか。」

「すみませんでした。」

人の心読むのは止めてほしいです。

「ふっ、それじゃあ戻っていいぞ。」

「あ、はい。」

疲れたし、寝るとするか。

「それじゃあ、先に失礼します。」

「ああ、それじゃあな。」

エレベーターから降りたら部屋の前にアリサがいた。

「どうしたアリサ、俺に何か用か？」

まあ、俺の部屋の前にいるんだから、用があるんだろうけど。

「えーっとですね。あの・・・その・・・」

言いにくいことなのか？

「とりあえず、部屋入ろうぜ。」

「えっ！あ、はい。」

部屋に入り、冷蔵庫を見る・・・、何も無いな・・・  
さて、どうするか。

「アリサ、コーヒーでいいか？」

「あ、はい、大丈夫です。」

コーヒーを入れて、アリサの隣に座る。

「で、どうしたんだ？」

「はい、あのですね・・・えーっと・・・」

？ よく分からないな、一人で任務に行ったこと怒ってる？  
でも、そんな雰囲気じゃないしな。

泣いた事・・・かな？

「アリサ！」

「えっ、あ、はい。」

そっとアリサを抱き寄せる。

「えっ、ちよっ、リーダー？」

「アリサ、俺居なくなったりしないから。だから安心してくれ、な？」

「はい。リーダー。」

ふっ、落ち着いてくれたみたいだな。一安心つと。あれ、アリサ泣いてる？ マジで？急に抱き寄せたりしたからか。

確かにそっくだよな。急にこんなことされたら泣きたくもなるよな。

「悪い、アリサ、急にこんな事して。今離れるから。」

「大丈夫です。それじゃあ、私、自分の部屋に戻りますね。」

「あ、ああ、おやすみ。」

「はい。おやすみなさい。」

アリサ機嫌悪くしたかな。部屋を出ていくアリサを見ながらそんな事を思う。

「はっ、寝るか。」

こうして、俺は眠りについた。

## 第1話 極東支部のリーダー（後書き）

みんなの口調どうでしたでしょうか？ちょっと心配です。

というかコウタのこと、すっかり忘れてましたw

龍「そういえば、いなかったな。ま、いいか。」

そうだね〜

コウタ「ちよっ、よくないよ。ひどくない。」

ま、次はちゃんと出すから。たぶん（ボソッ

コウタ「それならいいけど。」

というわけで、これからよろしく願います。

龍「よろしくな。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3000z/>

---

GOD EATER 非日常な日常？

2011年12月10日17時51分発行